『芸娼妓出世双六』とは？
――残存する稀少資料の活用法――

前　島　裕　美

1. はじめに

去年の夏、私はかつての花街を復原する作業のために、茨城県の潮来町でフィールドワークを行なっていた。なかなか思うように資料が集まらず行き詰まっていた私に、土地の郷土史家の方が一枚の双六の複写を下さった。

「これは多分明治時代のものだと思うんだけどね。ま、参考になれば……。」

この双六が表題にある「芸娼妓出世双六」のことであり、正式名称は「新版　潮来浜町芸娼妓出世双六」という。「浜町」というのは潮来町の中で、かつて遊廓や芸者置屋等が集まり、花街を形成していた場所のことである。現在ではすっかりなりを潜め、数軒残った料亭などが往時の雰囲気をかすかに漂わせているに過ぎない。

潮来町の浜町は、遠く江戸中期に起源を持ち、つい最近の平成2年まで花街の機能を残していた歴史の長い花街である。その歴史を復原しようとしても、聞き取り調査で情報を集められるのは大正時代以降であり、それ以前は文献に頼らざるを得ない。しかし、その頼りの文献があまり残っていないので、復原作業は難航する。この双六が作成されたとされる明治時代においても、近い時代と思いきや、まことに資料に乏しく、たかが双六と思われそうだけれども、この双六一枚の資料的価値はかなり大きなものとなる。

卒業論文においては、聞き取り調査が可能である大正時代以降を扱ったので、この双六については触れずじまいであった。しかし、このように貴重かつ興味深い資料が日の目を見ずに埋もれてしまうのは勿体無い話である。そこでこの紙面をお借りして、「新版　潮来浜町芸娼妓出世双六」について簡単に紹介させていただきたいと思ったのである。

2. 双六の概要

ここで紹介する双六の題名は、先程も書いた通り「新版　潮来浜町芸娼妓出世双六」である。わざわざ「新版」と銘打っているので「旧版」もあったものと思われるが、今のところ見つかっていない。この双六の発行元は、題名の下に記されている「会所　見番　三業取締」（遊廓内の管理事務所）であると考えられる。しかし、いつ、どのような意図を持って、浜町の会所がこの双六を作成したのかは明らかではない。そこで、双六の紹介をしつつ、製作された経緯を推測していきたいと思う。

1）双六の構造

さて、様々な推測を試みる前に、まずこの双六の構造を話さなければならない。ここで紹介する「新版 潮来浜町芸娼妓出世双六」は、日頃我々が慣れ親しんでいる双六と同様の紙双六であり、双六の打ち手はサイコロの出た目によって駒を進めていく。そのマス目が浜町の遊廓内の施設であったり、芸娼妓の源氏名であったりするところがこの双六の特徴である。

打ち手は一斉に、川面を進む帆舟が描かれたマス（双六の右下）からスタートする。その後「引手茶屋ゾーン」に突入し、30軒の引手茶屋（のマス）をクリアしなければ「貸座敷（＝遊廓）ゾーン」に入ることはできない。「貸座敷ゾーン」の初めにはまず「貸座敷　玉屋」が登場し、玉屋所属の芸娼妓の源氏名14名分が続く。その後「貸座敷　大藤屋」（芸娼妓8名）、「貸座敷　山口屋」（芸娼妓13名）と続くが、貸座敷の屋号の隣にわざわざその建物の外観が描かれているのがおもしろい。「大藤屋」にいたっては、絵に加えて「西洋造り」との注釈までついている。

これらのマスを順調に進んでいくと、最後の貸座敷「大川屋」にたどり着くが、芸娼妓名のマス

新版　潮来浜町芸娼妓出世双六

を13名分進んでいくと「潮来驅微院」というマスにあたる。聞き慣れない名前だったので、聞き取り調査の際に大正生まれの方に「これは何ですか？」とたずねると「梅検だ」という。梅検とは梅毒検査所の略で、かつて遊廓内に設置が義務づけられていた娼妓病院のことを指す。ちなみにこの病院にまで外観図がつけられている。外観図の横に書かれている注釈は、文字がかすれていて解読できなかったが、「休」という文字が読み取れるので、「梅毒にかかって一回休み」のようなことが書かれているのではないだろうか。

この「潮来驅微院」を通過した後は、引き続き「大川屋」の芸娼妓名のマスが9名分続き、その後、仕出しや（？）（6軒）・すしや（3軒）・菓子や（3軒）のマスをクリアすると、晴れて上がりとなる（双六の中央）。そしてこの上がりのマスには、中睦まじげな男女と神社が描かれている。絵の内容からして、借金を抱え花街で働かざるを得なかった芸娼妓が、良い旦那に巡り合って無事に身請けされたというようなことを示しているのであろう。要するにこの双六は、「芸娼妓出世双六」という名が示す通り、芸娼妓が無事身請けされ自由の身になるまでの、花街的サクセスストーリーをなぞらえたものなのである。

2）双六発行の経緯

では、発行元の浜町の会所はなぜこのような双六を作成したのであろうか。その理由は分かっていないが、おそらくは宣伝用に作られたものなのであろう。1）でも紹介したように、貸座敷については一軒一軒に外観図がつけられており、「西洋造り」などと建物のセールスポイントまで記載され、芸娼妓の源氏名が一人一人列挙されている。その他引手茶屋から菓子やにいたるまで一軒一軒の屋号がきちんと書かれており、この双六一枚で浜町の花街の構造がいっぺんに分かってしまうという具合になっている。

このことを考えると、この双六は浜町のPR用に作られたもので、遊客のガイドブック的役割を果たしていたのではないかと思えてくるのである。もしかすると、会所が各店舗から広告料のようなものを徴収して作成したものかも知れない。

更に、この双六は潮来町内に保存されていたものであるが、必ずしも土地の人々に配布されていたものかどうかは定かではない。私が行なった調査によると、大正時代以降浜町の花街の遊客は主に周辺地域の人々であったようだが、江戸時代は幕府の取り締まりの影響もあって、遊客は専ら外部の人間であった。この双六が発行されたのはちょうどその間の明治時代のことであるので、ことさらその判断が難しい。周辺地域の人々に広告として配布されたのか、それとも東京などの観光客を誘致するために使われたのか（注：かつての観光は現代と感覚が違い、遊廓に登楼することが観光と捉えられた時代もあった）、もしくは花街の会所内に常備され、遊客にパンフレット的に配布されたものなのか……。その真実は依然として分からないが、双六の絵について少し引っかかることがある。それは先程も紹介した通り、双六のスタート部分のマスに、川面を走る帆船が描かれていることである。ちなみに潮来の周辺地域の人々は、水上移動の際にサッパ船と呼ばれる帆のついていない独特の船を愛用していた。もし、土地の人々のみを意識して作ったのなら、ここにサッパ船を描いたとしてもおかしくない。外部の人々を意識したからこそ帆船を描いたのではないか、と推測するのは深読みであろうか。もしこの読みが当たっているとしたら、この時期の浜町の客層が分かり、興味深いのであるが……。

3）双六の現代的利用法について

当時、この紙双六で誰が遊んだのか（双六として正しく利用されたのかどうかは不明、また利用されたとしても内容からして少なくとも児童ではなさそうである）、はたまたどのように利用されたのかは分からないが、明治人の気分で双六で遊んでみるというのも一つの正しい利用法かも知れない。しかし現代的利用法として、このような貴重な資料を研究に役立てない手はないので、浜町の花街研究において、この双六がどのように役立つのかを紹介していきたいと思う。

花街研究において、いつの時代にどのような店舗が存在し、どのくらい芸娼妓がいたのかという質的・数値的な把握は、花街の盛衰を知る上で重要なポイントとなる。それらが精密に記載されていればいるほど、その資料の価値は必然的に上がる。もちろん、ここで紹介している「新版　潮来浜町芸娼妓出世双六」は、花街全体の店舗構成から芸娼妓の人数までを精密に記してくれているの

で、大変貴重な資料ということになる。ただ残念なことに正確な発行年が分かっていないため、他の資料を活用してある程度年代を絞り込まなければならない。

この資料を下さった郷土史研究家の大久保錦一氏は、ご自身の著書の中で、この双六は明治6～28年のものではないかと推測されている。その推測の理由については詳しく書かれていないが、私も他の資料と照らし合わせた結果、ほぼ同じ結論に達した。大正7年（1918）に発行された高村菰村著『潮来と鹿島香取』のなかにはかつての浜町遊廓について触れた箇所があり、そこにはこう書かれている。

「明治維新の前後までは四目屋、二葉屋、松葉屋、松本屋、千歳屋、恵比壽屋、河内屋、大口屋、玉屋等の妓楼ありて、引手茶屋も四十餘戸あり。遊女も百餘人を數へたりしが……（後略）」

明治維新前後と比べてこの双六の発行された当時は、貸座敷が4軒、引手茶屋は30軒、芸娼妓の数は総勢57名と数の上で大幅に減少しており、花街としての勢いが衰えていることは明らかである。浜町遊廓に陰りが見え始めたのは、地方紙『いはらき』新聞によると、どうやら明治時代の中期らしい。以下は当時の新聞記事の表題であるが、この二件を比較してみるとそのことが明らかである。

【潮来町貸座敷の繁栄　毎夜遊客百五十人】
（『いはらき』明治24年　9月13日付）
【暗黒の潮来遊廓　貸座敷は古着屋】
（『いはらき』明治33年　10月28日付）

浜町遊廓が明治中期までをピークに衰えていったことは、同上『潮来と鹿島香取』のこのような記述からもうかがえる。

「往時は妓楼引手茶屋軒を連ねたりしが、いつか水路の狭くなりて大船の入らざるより、繁昌をさをさ昔の如くならず。」

これらのことから双六の作成年代は、少なくとも明治維新後から明治時代中期にかけてであるということが分かる。さらに、もう少し年代を絞ることが可能である。双六の中に「山口屋」という貸座敷があるが、「山口屋」は明治28年頃に廃業し、経営者が代わって「菖蒲樓」という貸座敷になる。このことから、双六が作成されたのは明治28年頃以前のことであると推測される。

さて、作成年代を明治維新後から明治28年頃の間と絞ることができたが、この先は少々困難である。この間にも実は数値的な資料はあり、明治5年の「浜壱丁目商売書上」には、「遊女屋渡世六軒、仲茶屋渡世（引手茶屋のことか？）五十八軒」、明治26年発行の波末巴屋主人著『潮来繁昌誌』には、貸座敷5軒・娼妓68名・引手茶屋30軒というデータが記されている。時代にそぐわなくなり、後の大正中期に一軒残らず廃業するはめになる引手茶屋の数の推移を考えると、双六が作られたのは少なくとも明治6年以降であると考えても良いであろう。ただ、明治26年の『潮来繁昌誌』の記述については、引手茶屋の屋号において双六に記載されている名前と半数ぐらい異なるものの、件数自体は変わらないので、『潮来繁昌誌』のデータと双六のデータのどちらが古いかということは確定できない。しかも『潮来繁昌誌』に比べて双六の方では貸座敷の数も娼妓の数も若干減ってはいるものの、移り変わりの激しい花街の世界で、この若干数の変化によって、双六が『潮来繁昌誌』よりもあとに作られたと確定し、双六の作成年代を明治26年～明治28年頃としてしまうのはいささか早計過ぎるのである。

従って、私も大久保氏と同じく双六の作成年代については、明治6年～28年頃という結論に達した。正確な年代こそ確定できないものの、明治前～中期としての把握は可能なので、資料的価値は十分にあるのである。

また、こうした数の把握の他にも、この双六から学ぶことはたくさんある。この双六には、我々の知らないかつての「遊廓ワールド」が凝縮されているので、この双六を眺めていると当時の花街の様子を垣間見ることができるのである。

まず、スタート直後に並ぶ引手茶屋は、現代の我々には全くなじみの無い店であるが、この茶屋はかつての花街には欠かすことのできない店であった。先述の通り、大正中期になると当時の日本のモダン化に合わせて古い仕来りが次々と廃止され、それと同時に引手茶屋も浜町遊廓から姿を消すことになるのだが、それ以前は遊客はまず引手茶屋に行って酒宴をあげ、そこで初めて茶屋の紹介に基づき遊廓に登楼する、という手順を踏まなければならなかった。直接遊廓に出向くことは

「野暮」な行為とされ、敬遠されたのである。

また、「貸座敷ゾーン」の途中で出現する娼妓病院を「休み」のマスにするなどのしかけも、現代人にとっては興味深い。最近はフリーセックスの時代と言われ、様々な性感染症が増えつつあるとは言っても、梅毒等がポピュラーな病気かといえばそうではない。しかし、明治時代当時の新聞を見ていただければ分かるが、花柳病（＝梅毒、淋病等）の治療薬の広告がいかに多かったことか……。あの広告の多さは、花柳病が流行していたことを示すと同時に、遊廓に男性が登楼すること、つまり売春行為が一般に行なわれていたという、現代では考えられない当時の社会の様子を表わしているのである。双六に登場した病院も、当時の人々は別段珍しいとは思わなかったに違いない。

そして極めつけは、上がりの「身請け」である。人身売買が一般的で、女性の人権など無きに等しかったこの時代、家のために多額の借金を背負い、遊廓で働かざるを得なかった女たちにとって、良い旦那に身請けされ、借金を帳消しにしてもらうことこそ一番の出世であった。現代においてもこのような双六的出世ゲームが存在することは皆さんご存知の通りである。しかし、そのゴールは大金持ちになることであったり、幸せな結婚をすることであったりして、たとえ一世紀前のことであったといえども、その感覚のあまりの違いに驚きを隠すことができない。現代においても、未だ女性の社会的地位が高いとは言えない。しかし、人権など無きに等しかったこの時代の女性の地位の低さは、現代の比ではなかったのである。

このようにこの一枚の双六は、単に花街研究に役立つデータを与えてくれるだけではなく、当時の社会状況までも我々に教えてくれる。私がこの資料を興味深いと思ったのも、研究の一資料としてだけではなく、こうした理由からなのである。

3. おわりに

まず、双六についての研究をリサーチしないままにこの文章を書いてしまったので、何か不手際があるかも知れないがどうかお許しいただきたい。今回は特に双六という資料を扱ったが、偶然捨てられずに残っていた過去の物が未来の私たちに様々なことを教えてくれる。復原作業をしていても、博物館へ行ってみても、そんな偶然に感謝すると同時に、今ゴミとして捨てている何かも将来そんな可能性を秘めているのでは……と思うと捨てるのを躊躇してしまったりする。

最後に、資料提供者であると同時に卒論執筆の際、大変お世話になった、潮来町郷土史研究家の大久保錦一氏に厚く御礼申し上げたい。

【文献】

潮来町史編さん委員会（1992）『潮来町関係「いはらき」新聞記事表題索引目録』潮来町教育委員会
大久保錦一（1991）『潮来遊里史と潮来図誌・潮来絶句・潮来節』デザイン・アンド・デベロップメント
神崎宣武（1987）『盛り場のフォークロア』河出書房新社
高村菰村（1918）『潮来と鹿島香取』東京堂書店
波末巴屋主人（1893）『潮来繁昌誌』公文堂